

資源・エネルギー・環境・人口問題を考える

広領域教育



巻頭言 「広く」そして「深く」／石田 寛人

科学的リテラシーを育むこれからの理科教育

—2006年PISA調査の結果を受けて—／小 倉 康

原子力鐘は上野か —平和利用の黎明—／後 藤 茂

高レベル放射性廃棄物ってどんなもの？／秋庭 悦子

“ともいき” という新しい生活観

—21世紀に生きる人びとの“生活の知恵”—／勝田 祥三

アマチュア無線の利用と今後の展望／中村 日出夫

ハイブリッド模型自動車を用いた実験の改善／立 石 康

「みそ汁プロジェクト」を通じた食育の展開

—地域の食材を生かした交流学习の試み—／藤本 勇二

特別記事 「科学する心」の伝承

—伏見康治さんとのお別れに思う—／森 一 久

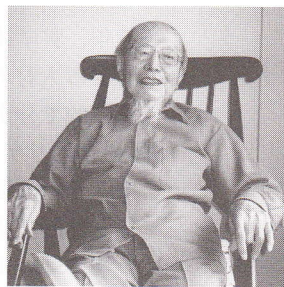
2008年 7月

ISSN 0389-6986

No. **69**

「科学する心」の伝承 —伏見康治さんとお別れに思う—

森 一 久



お元気な頃の伏見先生
2004年5月（撮影：菅沼純一）

ご指導・お付き合いを頂いて六十年、遂にお見送りの一文を認める時がきた。

思えば1948年、私は、物理出身の科学記者第一号として厚かましくも、才気煥発、正に旬の物理学者大阪大学教授、日本学術会議第一期会員にも選出されたばかりの先生に付きまとい、西宮のお宅にもお邪魔していた。すでに『驢馬電子』などの名著や卓抜な解説文で、教育者さらに「啓蒙家」としても、誉れ高き先生に、科学雑誌『自然』の編集者になり立ての私は、社内での議論の渦中にいたので、未熟ながら真剣であった。

当時の先端の物理学では、およそ常識では律しがたい「科学的真理」が、次々と発見されており、それをどう説明して、若者にその魅力を感じさせるかについて、私は心を砕いていた。大まかに言えば二つの方法がある。例え話（比喩）や図解を駆使して説明し、それで基礎物理等に魅力を感じるようになればよいと考える。もう一つは、丹念に実験や理論を、なるべく易しい言葉で簡潔に説明する手法。第一の方法は受け手のイメージや想像力に訴え、判ったと錯覚させるという側面があり、第二は「詰め込み教育」になり勝ちである。第三の道を模索していた私はその時、

第一の道の達人、伏見先生の門を叩いたというわけである。

さて、広領域教育研究会は、畑山積氏が大御所の茅誠司さんの強い支持で設立した。当時漸く表面化してきた環境やエネルギーの問題は、科学の諸部門に跨るテーマであり、およそ縦割り教育に馴染まない上に、さらにこれらの問題が、局所から地域、国、世界へと波及・拡大するは必然で、次世代ならびに成人教育の「広領域化」（総合化）を急げという事にあった。活動は、研究会と『広領域教育』誌の刊行に止まらず多岐に亘り、問題を抱える「地域」に出かけて大討論会を開くなどもしばしば。伏見先生は何度か住民ぐるみの熱論に加わり、その悠然たる風貌で会衆を肅然とさせたのは今も記憶に新しい。

会長になられたのは平成7年、二代目会長小倉武一氏が、伏見先生の参議院議員の任期切れを待って、口説き落とされた。私はたまたま、その政党に出馬を口説かれた時、隣の部屋にいて直後に会ったというのもご縁だが、後に「森君も茅先生も（国会議員になるのを）止めてくれなかったので、とんだ寄り道をしちゃって……」と先生が述懐されていたのも、今は懐かしい思い出である。